

どと存候ことに御座候。本文の所は其内御光臨の節、一二節も御覽被下候様に可仕候。

一、梁子一の御文章御見せ本望の至奉存候。別啓認置候まゝ、即附歸使候。それにも申上候ごとく、これらの文章時勢をも見申さるゝ事、世態もしれ候事に候。事の外に關係不少ものと奉存候。必ず御脱稿の後、一通御うつさせ可被下候。別幅にも申上候ごとく、必ず彼子耳にかゝり候事も可有之かと存候處有之候。果して今日の御紙上にも、其通被仰下候。某愚存は此所即本來の面目第一義に奉存候。彼子此たびの事、御序文にて見候へば、家中子弟教育の任と見え申候。彼天質は御存じの前の事に候。詩材はすぐれ候。似よりたる事に候間、文章などの事におし入れ候て用ひも候はゞ、手馴めされ候はゞ、これ又其材に應じ候事は可有之候。師道を以て任じ候は、なにとやらむ鶴を鷹に使ひ候やうの事にて、久しく候て事の敗れ可有之か。むかし濃州御守事に仕へられし時もその如くに候ひき。もしそれらの事も候時に、御文章の躰により、先きの暗き様に見候人のあるまじきものにも無之候。しかるに貴兄にも御覽

じつけられ候所有之と見え、第一節の所に彼平生を御申つくし、末節に至りて處士自由の身とはちがひ候間、人の師表となられ候所に心をつけ候へとは、よくこそ被仰候。もし彼子耳にあたり候はゞ、それはあなたの心得違に候。老儒先生に言を請ひ申され候上は、その言を服膺し候分別の筈に候。たゞ、ほめられたがり候て、見せものに仕り、ほこり候はん心得にては本意なく候。もし眞實に御尤と申す心候はゞ、彼子のためにはこれほどの家寶はあるまじきと奉存事に候。

一、此間ひとつ扱々めづらしき事を承り、推しひろめ候て大にして天下國家、小にして身家の心得に足り候はんと存候事一事候間、御次手に申上候。長崎豫州の家人にて、今度供仕り來り候ものゝ、なにとなく申物語に、菊は京にて事の外はやり申候。其身も作り候と見え申候。扱菊と申すものは、元來黄なるものと見え候。外の種々の色は、人の手入にてかはり候と存候。其故は京へ參り候事々候へば、菊の種々の苗をうつし、残りしは長屋のわきにすて置候。はほど有之候。ひたと珍しきが入り候故、それをば今年も明

年も、すてものに仕り置候て、三年過ぎ候て花の開き候時に、ふと心づき見候へば、種々の菊共皆々一同にすきと黄色の花に成候。然れば種々の色は、手入にて出來候事と存候と申候き。此もの元來不學無術にて、黄を以て正色とすなど申す事など、夢にもしらぬものに候。たゞ、見候所を申したるにて候。これにより存候に、月令に菊有黄華と候時分より、陶淵明時分迄は天生のまゝにて、菊といへば黄なるものに候と見え候。其後唐宋の比より、種々に藝菊の法訣など申す事にて戕賊せられ、菊もよろたへ候て、たとへば人に酒をのませ、酔狂し候を見候やうの事になり候事と存候。然らば君子は黄花の外は、賞し候はん事にもなく候はんか。かの長屋の隅にすてられ候は、人の賞翫に逢候はぬが幸になり、靜にして天性を復して皆々黄に成たるにて候は、酒の酔の醒たるに可有之候。人多くして天に勝つと申すも、天定り候と申すも、夜氣平旦の氣と申すも、赤子の心を失ひ候はぬと申すも、千言萬語種々の工夫可有之事に候か。人に手入れをせられよろたへ候は、まだしもの事に候。自分によろたへ候て、種々の色をあらはし、黄色

をうしなひしは猶又無念の事にも候はん。さりとは珍敷事をためし候物語承候と存候故、一二大略申上候。以上。

卯刻

筑後守

尙々東雅の事も、居所もなくよろたへ候うち、なにも書物を見候はん事もならず中、ためにあとさきなく書あつめて、東坡海外にて松人談鬼候に似たる事、轉變して日を送り候類に候へ共、したて候物の事に候へば、大手筆を勞したきとの志願のみにて候。萬々面上。已上。

是は梁田生へ贈候序文、新井氏へ見せ候へば其返書にて候且又菊の事被申候候。此兩件いづれも承事に存候。又是ほどの見識ある人難得候。同志の衆へ御見せ可有候。先生此時東雅の序文御出來候事。

一、長壽者善通寺祐正

能州鳳至郡浦上郷田村善通寺隱居祐正、享保七年百二十三歳。當住五十四歳、祐正が第六子と云。一向宗故也。八十一歳の女今現在、其餘男女の四子皆亡。牧十郎兵衛今茲船破損御用に付、皆月に在留の内、祐正へ對面候處、年來八十歳許に相見え行歩も相叶ひ、かたき梨實なども給申、目耳も達者に候。子供は何も四十歳以後出生、江戸御城御普請の刻人夫にて罷越、御堀浚申候。大坂陣の儀も承候得共、